



Title	続編・聖ロクス(胸元刻印紅色十字架)崇敬
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

聖ロクス，胸元に紅色小十字架刻印，黒死病除け守護聖者

続編・聖ロクス(胸元刻印紅色十字架)崇敬

サンティアゴ・デ・コンポステラ城壁外にたたずむ 18 世紀再建の聖ロクス小教会
「見る」「知る」「アーカイブ」の「るるぶ」CSCD 電子学際支援サービス・カードを作成して
いこうと始めています。みなさんのお知恵を貸して下さい。



写真(上左)：サンティアゴ・デ・コンポステラ城壁外に残る聖ロクス教会正面扉に安置される聖ロクス像。

下に「コンフラリア(兄弟的盟約団体)の出資にて 1781 年再建」と記す(2007.3.7：撮影)

写真(上右)：教会前にある，聖者伝説に由来「延命の糧」：パン屋(同上日：撮影)

写真(下左)：大聖堂裏手の風景(同上日：撮影)；写真(下右)：旧市街地の趣ある廃屋(2007.3.5；撮影)

ここではリスボン[聖ロクス](#) (ロケ)教会に所蔵される 16 世紀宮廷画家グレゴリオ・ロペス(?-1550 年)工房制作になる下記 4 枚(画面隅に小画面。結果 8 枚)構成の絵画を参考として聖者の生涯をたどる。

「生誕と青年期」という画題の 1 枚目はモンペリエが舞台で、胸元に、命名の由来となった

「紅色小十字架」を刻印され、生まれながらにして聖別された誕生(1347年[?])の主場面と、20歳前後で富裕な両親—父親はモンペリエの高級地方官吏(総督)であった—と死別し、遺産の大半を貧者に施し、残りを伯父に譲渡、みずからは使徒聖者墓参の巡礼でローマへ旅立つ副場面(右隅)。

2枚目のタイトルは「**英国人枢機卿の奇蹟と教皇謁見**」で、1367年アペニン山脈を越え、旅の途上主要な都市で十字を切って黒死病患者を治癒した後、ローマに3年滞在することになるが、その間ペスト感染した有名な英国人枢機卿の額に紅色十字架を刻印、死の際から救済した場面が主で、副画面に、友人となり、聖者の守護者となった枢機卿が彼を教皇ウルバヌス5世(在位：1362-70年)に拝謁させているところが描写されている。

3枚目「**ピアチェンツァ滞在と森林への逃避**」は1371年イタリア北部ピアチェンツァの病院で患者治療に従事していた折、ある夜半天使の告知によって、鼠蹊部に激痛を感じ、横根を生じて瞬時にして黒死病に罹患してしまう。即刻病院を追放されるが、それが主場面を構成している。その後人里離れた城壁外の鬱蒼とした茂みに粗末な茅葺小屋を拵えて、飢渴して瀕死の状態に陥り、また疫病のために酷く消耗し、よきキリスト教徒として天寿を全うする心構えをしていた時、生命の泉を湧き出させた天使の奇蹟と、裕福な騎士ゴダルドの愛犬が食卓から失敬して、運ぶ食糧によって病の危機を脱出することができた場面は右隅に見える。

画題「**モンペリエ公爵による逮捕と祝福された死**」の4枚目は神命で祖国に帰還するが、乞食と見紛うが如く、あまりに変わり果てた姿ゆえに権威筋にも、伯父であった公爵にも認知されず、間諜容疑で逮捕される場面がメインで、左隅に5年間圜圉の鎖に繋がれ、ひっそりと獄死した(1379年)場面が描かれている。

死後獄吏が発見した時は大輪の光輝が遺体を覆い、脇には「聖者に助力を仰ぐ者は黒死病から救われよう」と記された文書が残されていた。

ただこの生没年について、欧州全般でペストが大流行した1347-54年頃に彼が誕生し、ローマ滞在の3年間は1367-70年にあたるが、ローマ教皇不遇の「アヴィニョン捕囚」時代(1309-77年)ながら、教皇ウルバヌス5世はこの3年間英仏百年戦争(1339-1453年)の仏劣勢に乗じてローマに教皇庁を移しているのである。なお教皇の在位当初は1361-62年のペスト第2波にあたっている。また聖者没年は「教会大分裂」の時期(1378-1417年)に相当している。

ところが、ロンバルディア王国ブレシア首長フランチェスコ・ディエド著『聖ロクス伝』(1478年)や13世紀中葉ヤコブス・デ・ウォラギネによりラテン語で上梓、視覚芸術作品制作の審美的源泉となった白眉の聖者伝『黄金伝説』のウィリアム・キャクストン翻訳英語版(1483年)によると、生年は1295年頃、没年は1327年、命日(祝日)は8月16日とある。

上記「教会大分裂」の收拾を図り教会再統一を決定し、他方宗教改革に先鞭をつけたイギリスのウィクリフ(1320 年頃-1384 年)やベーメン(ボヘミア)のフス(1370 年頃-1415 年)に異端児の烙印を押して処刑したことでも知られるコンスタンツ公会議(1414-18 年)会期中、1416 年黒死病の脅威に晒され、聖ロクス祈願行列実施によってペストは終熄したと記録に残るが、1460 年代に遡る聖ロクス崇敬は 1477-79 年イタリア北部で席捲した鼠蹊部腺ペスト流行の折、一気に高まったとされている。

そうすると先に紹介した 14 世紀後半に生没年が移動した伝説の植えかえは、後代になって再解釈され、32 年の生涯期間を史実と突き合わせて、封建制・荘園制の崩壊と教会勢力の衰微を如実に物語る 2 回にわたる黒死病流行、「アヴィニョン捕囚」、教皇ローマ帰還、「教会大分裂」という近世中央集権国家の成立に至る時系列的展開に都合よく収まったということになるのであるが、もともと欧州で 14 世紀後半以降ペスト除け聖ロクス崇敬の萌芽原型が既に認められたことの証左であり、1438 年再度黒死病の脅威に晒されたフェラーラ公会議ではペスト除け「聖ロクス祈祷文」が決定されている。



上記写真はキリスト教巡礼のメッカ大聖堂前の 2012 年 3 月酷暑と 2013 年酷寒

【添付ファイル】

リスボン聖ロケ教会附属元施療院扉裏側にある手洗い場.素朴な青白装飾絵タイルは出色で、巡礼者が利用したことを窺わせる銀箔貝殻の縁取りも目にとまる(2007.3.12：撮影)



上記4枚の写真（上左・右；下左・右，各画それぞれ手前・奥の時系列）は
 聖ロクス博物館所蔵作品：2001.9.18 撮影

出典：[活動情報：続編・聖ロクス（胸元刻印紅色十字架）崇敬，CSCD，2008.3.20](#)